

事例検討会に継続参加している 在宅ケアに従事する看護職者の経験

前 久 保 恵¹⁾・上 野 昌 江²⁾・和 泉 京 子²⁾

Experiences of Nurses who Periodically Participate in Case Conferences:
Nurses Engaged in Home Care

MAEKUBO Megumi, UENO Masae and IZUMI Kyoko

Abstract: The purpose of this study was to clarify home care nurses' experiences with voluntary and periodic participation in case conferences. Interviews were conducted with five nurses and the data was analyzed qualitatively. The home care nurses' experiences with voluntary and periodic participation in case conferences were classified into the following five categories: "participate in case conferences that involve feeling relief", "performing Etoki through dialogue", "applying case conferences to practice", "periodic participation influenced by others" and "producing learning opportunities and integrating one's own and others' learning". The results suggest that periodic participation allows nurses to experience reflection through dialogue.

Key Words: case conference, experience, periodic participation, dialogue, reflection

抄録: 本研究の目的は、在宅ケアに従事する看護職者が事例検討会へ自主的に継続参加する中での経験を明らかにすることである。研究協力者は、看護職者5名で、インタビューによるデータ収集を実施し、質的に分析した。その結果、在宅ケアに従事する看護職者が事例検討会へ自主的に継続参加することの経験は、《安心な場としての事例検討会への参加》、《対話を通して事例を絵解きする》、《事例検討会と実践との連動》、《他者からの影響を受けながらの継続参加》、《学びの場をプロデュースし、自己の学びと他者の学びを統合する》の5つのカテゴリーに分類することができた。継続参加の中での経験では、対話によるリフレクションが行われていることが示唆された。

キーワード: 事例検討会、経験、継続参加、対話、リフレクション

I. はじめに

訪問看護師の人材育成はサービス提供者の確保として重要な要因であり^{1,2)}、訪問看護師自らが学ぶ力を獲得し、専門職としての成長を促す教育は緊急の課題である。しかし現に行われている訪問看護師の現任教員として講義形式の学習形態で行われる画一的な教育方法は、多様な教育背景を持つ看護師に標準的な知識

や制度等への理解を促すことを主眼に置かれるため、「自ら学ぶ力」の獲得は望めないとの指摘がある³⁾。

また池田らは「看護師に対する継続教育としては、いわゆる知識や技術の習得を目的とした集合形式の研修を充実させるばかりではなく、一人ひとりの看護師が、自身について、そして患者・クライアントの関係に焦点を当て、看護の内容と質を丁寧に振り返る作業の必要性」⁴⁾を指摘している。

多様な形態の継続教育の中にあって、事例検討会は

¹⁾ 甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科

²⁾ 大阪府立大学看護学部

石井らが「事例提供者の事例を教材として共有し、提供者も出席者も皆が共に学び、自己の看護を振り返り、問題に気づくことによって、さらに成長していこうとする研修である」⁵⁾と述べているように、基礎教育や継続教育の手段として重視されている⁶⁾。また、看護職者対象の事例検討は多くの目的で用いられており、その効果についても報告されている⁷⁾。さらに宮本ら⁸⁾が、「どのような事例検討会も、参加者の問題意識に応じて重点を異にしながら、様々な機能を萌芽的に備えているはず」⁹⁾と指摘しているように、発展的な継続教育への可能性がある。

看護職者は、自らの自己啓発のための様々な継続教育プログラムの中から自主的な事例検討会を選び、事例提供者としてだけではなく継続して事例検討会に参加している。参加者である看護職者は、その時々に応じて、事例検討会に何らかの意味を自ら見出していると考えられる。このような自主的な事例検討会に参加している看護職者が自主的な継続参加を通じてどのような経験をしているのか、参加者の視点からその経験を描くことが必要である。

II. 研究目的

在宅ケアに従事する看護職者が事例検討会へ自主的に継続参加する中での経験を明らかにすることである。

III. 用語の定義

松尾¹⁰⁾は、経験とは「人間と外部環境の相互作用」とし、「直接-間接の次元」と「外的-内的の次元」2次元で整理しており、本研究でもこれを用いる。

「直接-間接の次元」とは、直接経験（身体を通じた現象への関与）と間接経験（言語・映像を通じた事象への関与）であり、「外的-内的の次元」とは外的経験（関与する事象の客観的特性）と間接的経験（関与する事象の理解・解釈）である。

IV. 研究方法

1. 研究対象

同一の事例検討会に3回以上継続して参加している在宅ケア領域に従事する看護職者5名を研究協力者とした。ただし本研究では事例検討会への継続参加を焦点としているため、事例提供の経験は問わないものと

した。事例検討会は、1~2か月毎に1回程度で自己研鑽を目的に開催され、所属職場を超えて開催されているものを取り上げた。所属職場内で行われるケアカンファレンスは除外した。

研究協力者の選定は、自主的な事例検討会2箇所の主催者・運営者（参加者）に前述の条件を満たす看護職者を紹介してもらい、紹介された看護職者に研究協力を依頼した。

2. データ収集方法

研究協力者に「事例検討会へ自主的に継続参加することを通じて、どのような経験をしているか」についてインタビューガイドに基づき半構造化インタビューを実施した。また研究協力者の属性についても質問した。インタビューの時間は約60分である。インタビューは研究協力者の了承を得て録音し、逐語化しデータとして用いた。

データ収集期間は、平成20年7月1日から平成21年8月31日である。

3. 分析方法

データ収集と分析は平行して行い、研究協力者ごとの逐語録から、事例検討会に継続参加する中での経験に関する文脈を抜粋した。引き出された記述内容が類似するものをまとめ、コード化した。研究協力者が増えるごとにこの作業を繰り返し、得られたデータを順次コード化した。以前のデータとその類似点や相違点を比較する継続比較法を用いて分析を行い、同じ特徴を一つにまとめサブカテゴリー化した。抽出したサブカテゴリーを比較し、分類および統合しカテゴリーへと体系化した。

4. 倫理的配慮

本研究は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施し、以下の点に配慮した。研究参加は自由意思であり、いつでも参加拒否ができること、得られた情報は厳重に管理し研究以外の目的で使用しないこと、論文等で公表する場合は個人を特定できないようにし個人情報厳守することなどを書面と口頭で説明し、同意書へのサインを持って研究参加の承諾を得た。また、インタビューはプライバシーの守られる場所で実施した。得られたデータは研究終了後、速やかに破棄することとした。

V. 結 果

1. 研究協力者の概要（表1）

研究協力者は5名で、勤務場所は、訪問看護ステーション3名、クリニック（訪問看護あり）1名、地域包括支援センター1名で、事例検討会への継続参加期間の平均は8.8年間であった。研究協力者全員が事例提供をした経験があった。

2. 在宅ケアに従事する看護職が事例検討会へ自主的に継続参加することの経験

在宅ケアに従事する看護職が事例検討会へ自主的に継続参加することの経験は、《安心な場としての事例検討会への参加》、《対話を通して事例を絵解きする》、《事例検討会と実践との連動》、《他者からの影響を受けながらの継続参加》、《学びの場をプロデュースし、自己の学びと他者の学びを統合する》の5つのカテゴリーに分類することができた（表2）。以下にその詳細を示す。

なお、カテゴリーは《 》，サブカテゴリーは〈 〉、データは字体を変えて示し、

わかりにくい部分は修正・補足した。

1) 《安心な場としての事例検討会への参加》

《安心な場としての事例検討会への参加》は、〈参加者が肯定的に受け入れられる安心感〉、〈所属することの心地よさ〉といった2つのサブカテゴリーから構成されていた。

〈参加者が肯定的に受け入れられる安心感〉では、事例提供者が大切にされている実感があり、事例提供者としてだけでなく参加者としても、事例検討会の中で肯定され自分たちが受け入れられる安心感を語っていた。そしてそのような経験が事例検討会に参加する中での自分の参加姿勢を形作っていた。

今まで私が経験してきた事例検討は、時に下手をすると事例提供者がすごい批判されたりとか、非難されたりする 때가 あつたりすることもある。けどそうではなくて、A 研究会はすごい事例提供者が守られているというか、何を言ってもいいというか、自分がさらけ出せるというか、そういうのを感じたので。（中略）お互いが高め合えるじゃないけど。事例提供しても検討メンバーで参加していても高め合える。これが本当の事例検討なのかな、みたいなのは感じました。（No 1）

ほんとさせて、本当のことが言えて、安心してしゃべれるという場所になってるのかなという気が、私はしましたね。だから、また安心して次、行ける。そしてまた次、聞きたい。（No 3）

〈所属することの心地よさ〉では、〈参加者が肯定的に受け入れられる安心感〉から事例検討会に参加することの居心地のよさ、さらには会に所属する感覚につ

表1 研究協力者の概要

No.	職場	年齢	事例検討会の継続参加期間
1	訪問看護ステーション	43 歳	10 年間
2	訪問看護ステーション	51 歳	10 年間
3	クリニック（訪問看護）	58 歳	8 年間
4	訪問看護ステーション	44 歳	10 年間
5	地域包括支援センター	56 歳	6 年間

表2 在宅ケアに従事する看護職が事例検討会へ自主的に継続参加することの経験

カテゴリー	サブカテゴリー
安心な場としての事例検討会への参加	参加者が肯定的に受け入れられる安心感 所属することの心地よさ
対話を通して事例を絵解きする	気軽に事例が出せた 対話を通して事例を多視点から可視化する 事例の絵解きが瞬に落ちる
事例検討会と実践との連動	多視点からの可視化を実践に活かす 自分の実践への裏付けができる 次々と元気をもらう
他者からの影響を受けながらの継続参加	一緒に学んできた仲間がいる モデルとなる人の存在
学びの場をプロデュースし、自己の学びと他者の学びを統合する	事例の絵解きの魅力にはまる 学びの場としての事例検討会を継続させたいという思い 事例検討会の運営役割を通して他者の学びをサポートする

いて語っていた。

自分の成長を促進させてくれる会なので、そこに所属していることが居心地がいいというか、もうその会にのめり込んでいるというか。自分に気付きを与えてくれて、自分の成長をどんどんさせてくれる会だなと思うので、どンドンどンどのめり込んでいったかなと。(No 1)

2) 《対話を通して事例を絵解きする》

《対話を通して事例を絵解きする》カテゴリーは、事例提供するというアクションを起こすことができ、事例提供者と参加者との対話を通して、絵解き、すなわち事例を多様な視点から可視化し、それを解釈し言語化することを通して事例の捉えなおしと自分が本当に悩んでいたことを明確にすることである。その結果としての絵解きは事例提供者や参加者の腑に落ちる経験へとつながっていく。このカテゴリーは3つのサブカテゴリーから構成されていた。

《気軽に事例が出せた》では、実践で振り返りたい事例をたくさん持っていて、忙しさやプレッシャーから事例を提供することに踏み出せなかったが、まずは事例を提供してみるというアクションを起こすことができたことが語られた。

本当にたくさん事例を持っているんですけど、それをやっぱり分析するということが日ごろできていないこともあったり…。それがすごく簡単にということじゃないんですけど、気軽に出せたというところで、すごく実になったのかな。書いたものを出すということ自体がすごくプレッシャーになっていたかなと。現場の者ってそういうところがすごくあるかなと思って。書くこと自体が煩わしいところも。忙しくてできないとすれば、パーととりあえず書いてみて持って行くみたいなこともできると。(No 2)

《対話を通して事例を多視点から可視化する》では、事例提供者と参加者間の職場や実践経験の違い等を活かした対話を通して、事例を多様な視点から立体的に捉え可視化する経験が語られた。

子どもが一見普通なんだけど、IQとかも高いんだけど、実は発達障害。その子どもを持っているお母さんが介護者というケース。何の知識もなかったんで、そのとらえ方で、私はそのお母さんというのが捉え切れなかったんだけど、そういう子を持つお母さんは結構大変よという

ふうに、その発達障害の看護の経験のある人が言われて。そこから、そうなのかとか思ったりしたので。なかなかそんなふうには見れていなかったと思うと、印象深いですよね。目からうろこか、視点が変わったというか。(No 4)

一つ事例をまとめて出したら、すごく皆さんに聞いていただけて、自分にまた気付けた。(No 2)

《事例の絵解きが腑に落ちる》では、可視化された事例を解釈し言語化することを通して事例の捉えなおしと自分が本当に悩んでいたことが明確になり、その結果として事例提供者や参加者の腑に落ちる経験が語られた。

事例検討をした時に、自分の事例でその困り事というか悩みどころを、すごく明解に解説されて、「ああー」って落ちるというかね、それを経験して。自分が事例を出したわけではなくて、人が事例を出したのを聞いていても、それを感じて。納得できる。「ああ、そういうことが起きてたんだ」とか、「そこにはこういうことがあったんだ」、みたいなところが、ストンと来る。(No 1)

3) 《事例検討会と実践との連動》

《事例検討会と実践との連動》は、3つのサブカテゴリーで構成されていた。

《多視点からの可視化を実践に活かす》では、事例検討会で経験した多視点からの可視化が実践の中でも発揮されることが語られた。発揮される場合は、看護実践の場だけでなく職場での会議の場であった。また、このような現象は実践しながらのこともあれば、実践後の自己の振り返りとして現れていた。

それでもやっぱり困ることはあるんだけど、その困るところで、ただ単に「困った困った」じゃなくて、この人は、「そうそう、こないだの事例検討のときに言ってたようなこと思っているのかな」という、一歩引いて見れるというか、ケアまでできなくても見れた、全体に見えると言ったらちょっとおおげさかもしれないけど、そんなのが見えると自分が落ち着いて行動できるじゃないですか。巻き込まれないというか、巻き込まれてるところもあるかもしれないけど、そういうところはちょこちょこできるように思うんですよ。(No 4)

(病院とのチームカンファレンスで)つい先日ドクターが

引っかかっておられたんですけど、みんな現状をどうするかという話ばかりしていて、その一番、(事例を)出している先生の引っかかりに誰も気付いていなかったときに、「先生が一番引っかかっているのは、この言葉ですよ」と言えたときに、先生が「ごもっとも」とか言われて。その先生の引っかかりが言えたというのは、すごく自分はステップアップしたなという気はしましたね。あそこは実感しています。(中略)時々、「在宅のほうでは」とかいう感じで、私にちょっと振ってこられたりすること増えてきていますので。(No 2)

〈自分の実践への裏付けができる〉では、事例検討を通して自分の看護実践が絵解きされることで裏付けができ自信を持って看護することができることが語られた。

保障される、自分の、あなたのやり方でよかったんだよって。でも、ここはもっと気をつけていかないといけない部分なんだよねというのを、それがみんなから言われるのではなくて、自分が分かってく、質問されて、自分が引き出されていくということで…(No 5)

〈次々と元気をもらおう〉では、〈参加者が肯定的に受け入れられる安心感〉や絵解き後の参加者からの看護実践への提案があることで、実践してみようという元気がもらえる経験が語られた。

「こういうふうにしてみたらいいかもしれんよ」とか、提案があったり。それが絶対その人が受け入れられなくても、次から次とみんなが力をくれるじゃないですか。そしたら、やってみようかなという気持ちにさせるというのは、絶対、A 研究会よね。あれはよそでは経験したことがない。(No 3)

4) 《他者からの影響を受けながらの継続参加》

《他者からの影響を受けながらの継続参加》では、《対話を通して事例を絵解きする》過程や事例検討会に継続参加することにおいても他者からの影響を受けたことが語られた。このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーから構成されていた。

〈一緒に学んできた仲間がいる〉では、《対話を通して事例を絵解きする》過程の特に対話においての仲間の存在や仲間がいるから事例検討会に継続参加しようと思えることについて語られた。

(事例検討会に) 出向くだけのエネルギーがなかった。もう日々ぐったりというのと、とりあえず、仕事に追いかけてまわってたね。振り返ろうとか、そこにまで思いが行き届かなかったね。もう目の前の仕事をこなすのに必死。そうそう、きっかけはね、××さんじゃなかったかな、電話くれた。「何してるの。(次の事例検討会ではあなたの力を借りたいので) 来てよ」、とか言われて、『ああ、なつかしい声』とか。あのとき、そうそう、あの人が私にケアしたんよね、うまいこと言うて。そのときに彼女はね、私に役割をくれたんだと思うわ。うまいんよ。仲間内がそうやって誘ってくれて、行ったときに、またみんながよいしょしたんですよ。(No 3)

〈モデルとなる人の存在〉では、モデルとなる人のようにになりたいと思うあこがれが事例検討会に継続参加する吸引力となっていることが語られた。

私があそこの会へ行くのは、やっぱりモデルがあるから。あのようになりたいというのが、ずっとあるんですよ。モデルがちゃんとしてるから、やっぱり継続して行けるんだと思う。(No 3)

5) 《学びの場をプロデュースし、自己の学びと他者の学びを統合する》

《学びの場をプロデュースし、自己の学びと他者の学びを統合する》では、事例の絵解きの魅力にはまり、その学びの場を継続させ学び続けたいという自己の学びの達成が、事例検討会の運営役割を果たして他者の学びをサポートすることで実現され、自己の学びと他者の学びの両者が相互に関係し合うことで統合されていくことが語られた。このカテゴリーは3つのサブカテゴリーで構成されていた。

〈事例の絵解きの魅力にはまる〉では、《対話を通して事例を絵解きする》過程に、より積極的に参画できるようにになりたいということや、そのことを通して自己の成長につながるのを継続していきたいということが語られた。

最初はちょっと分かりにくかったんですけど。(検討される) 事例は違うけれども、やっぱり何を見たらいいとか、そういうのが分かってくるじゃないですか。そうなってくると、何か本当にすごい面白くなってきて、続けていきたいなというのはありました。(No 4)

〈学びの場としての事例検討会を継続させるという

思い)では、事例検討会の参加メンバーの移り変わりや参加メンバーの増減、その他会を継続していく中で、紆余曲折がありながらも、自分たちの学びの場としてその必要性から事例検討会を継続させていくという思いについて語られた。

A 事例検討会に一回こっきりで来ない人も、私、OK だと思うんですよ。また何かのときに、ふと思い出したときに、また行ける場所というものがやっぱり消えないで残っておくというのが一番。だから、絶対的にずっと切れずに継続していることが OK ではなくて、そういう場所が消えないということが絶対のような気がする。(No 3)

〈事例検討会の運営役割を通して他者の学びをサポートする〉では、自分たちが経験したことを共有できる仲間を集めることや、他者の学びをサポートすることについて語られた。

その醍醐味じゃないけど、良さというか、そういうのでできるだけ多くの人に知ってもらいたい。私と同じようにストンとこう落ちるような体験をしてほしいというか、今まで気付いてない自分に気付いてほしいというか。そういう体験をできるだけ多くの人にしてもらって、本当の意味での事例検討のよさみたいなものを知ってもらいたい、みたいなのはありますね。(No 1)

(事務局運営の)役はもらっている。ただ、(役割を)もらってないころは参加して自分が学べばよかったけど、やっぱり参加していただきたいというほうに回ってると思うので、そうなってくると自分だけの満足じゃなくて、皆さんにも何か持って帰ってもらいたいという思いはあります。(No 4)

VI. 考 察

1. 対話を通して事例を絵解きすることの重要性

本研究において《対話を通して事例を絵解きする》ということは、事例提供するというアクションを起こし、事例提供者と参加者との対話を通して、絵解き、すなわち事例を多様な視点から可視化し、それを解釈し言語化することを通して事例を捉え直し、支援のなかで参加者が本当に悩んでいたことを明確にすることにつながっていた。池西ら⁹⁾は《対話》、〈状況の見方の変化〉・〈課題の明確化〉から構成される《問題意識

の再構成》、〈異なる視点からの状況の吟味〉を臨床看護師のリフレクションの要素として抽出している。これは、本研究における《対話を通して事例を絵解きする》ことは、事例検討を通して、看護実践のリフレクション¹⁰⁾と捉えることができる。しかし、本研究で見いだされた《対話》は、他者との応答を特徴とし、しかもリフレクションが他者と共有されるという点であり、池西らが示した臨床看護師のリフレクションが自己との《対話》を通して行われることとは異なる。さらに、この他者との対話は、事例検討会におけるリフレクションを促進する可能性がある。なぜなら、事例検討は「行為の後の内省 (reflection on action)」¹⁰⁾であり、それは時に痛みを伴いもすると言われている。経験の中には手痛い失敗もあり、失敗経験をリフレクションすることは、時に葛藤を引き起こし、それまでの知識や仮説や前提を問い直すことにもつながるといわれている¹¹⁾。本研究でも《対話を通して事例を絵解きする》ということで、自らの経験をリフレクションし、そのことが事例の捉えなおしと自分の課題の明確化につながっていたと考えられる。

この痛みを伴う可能性のあるリフレクションを促進したと考えられるのが、「安心な場」と「他者の存在」と「対話」である。中原¹²⁾は、リフレクションを促進させるものとして、他者との対話とリフレクションが「外化 (externalization)」によって他者と共有されることをあげている。本研究において抽出された《対話を通して事例を絵解きする》は、事例提供者と参加者との対話を通して、絵解き、すなわち事例を多様な視点から可視化し、それを解釈し言語化することを通して事例の捉えなおしと自分が本当に悩んでいたことを明確にすることであり、まさに対話を通したリフレクションであった。さらに、結果としての絵解きは事例提供者や参加者にとっても腑に落ちる経験へとつながっており、リフレクションが外化され事例提供者と参加者に共有されている。

この中で特に「安心な場」は、事例提供者が事例提供する契機となった経験をリフレクションすることや自分の課題に直面すること、また参加者が自己の前提への変化させる際に重要であると考えられた。

自分の内面とかが出せるというのかなあ。年のせいとか思ったんですけど、そういうわけじゃなくて。(事例検討会での安心感や受け入れられる) そういう経験を積んで、自分のことを言ってみたりとか、困った内容を言ったり、人の話が聞けたり。自分自身のことが話せることで、気

持ちよくなっていくのは、成長なんじゃないけど、それは最近できるようになっているよなあと思うんですけどね。(No 2)

人が変化するように迫られたときに感じる心理的な安心感の程度を組織学習研究では「心理的安全」という概念で言いあらわす。心理的安全が低い時、人は変化をするのをためらい、攻撃されるのではないかという恐怖に脅えている状況では挑戦しようとし¹³⁾ない。安全で受け入れられる経験が実践のリフレクションを促し、自己の前提の変化を促進することが示唆された。

「安心な場」が変化へ挑戦させ、「他者との対話」により無意識かつ暗黙のうちにやっている実践が他者によって引き出され、他者に言語化して語ることにつながる。また、対話を通して自己と他者のリフレクションが可視化され共有可能となると考えられる。

VII. ま と め

本研究において、在宅ケアに従事する看護職が事例検討会へ自主的に継続参加することの経験として、『安心な場としての事例検討会への参加』、『対話を通して事例を絵解きする』、『事例検討会と実践との連動』、『他者からの影響を受けながらの継続参加』、『学びの場をプロデュースし、自己の学びと他者の学びを統合する』の5つのカテゴリーが抽出された。この事例検討会での経験から看護職は、自己の実践を安心して受け入れられる場で、他者との対話を通してリフレクションし、自己と他者とのリフレクションを共有していた。〈学びの場としての事例検討会を継続させるといふ思い〉では、事例検討会の運営面において継続していく中での紆余曲折がありながらも、自分たちの学びの場としてその必要性から事例検討会を継続させていくという思いについて語られていた。村松ら¹⁴⁾は対話リフレクションが新任保健師と熟練保健師の自己成長を共に確認させ、相互に成長を促す場として重要であると指摘しており、本研究において「今まで気付いてない自分に気付いてほしいというか。そういう体験をできるだけ多くの人にしてもらって、本当の意味での事例検討のよさみたいなのを知ってもらいたい」と語られたように、この事例検討会のような学びの場が在宅ケアに従事する看護職に求められている。

VIII. 研究の限界

本研究では、2つ事例検討をしている会に協力を依頼したが、参加継続の期間が長く、会の運営を担う5名の参加者となったため、経験に偏りが生じたことが否めない。また、インタビューで語られた内容を分析するため、協力者が意識し得ていない経験が含まれていない。今後、本結果から明らかになった経験を基に、さらに多くの研究協力者による探求を継続していきたいと考える。さらに今後研究を継続する中で、参加観察等の他のデータとの併用も検討したいと考える。

謝辞

調査にご協力くださいました看護職の方々、事例検討会の関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) (社)日本看護協会：プロジェクトG 人材育成（訪問看護管理者教育）の観点から考える訪問看護キャリアパス、訪問看護事業所数の減数要因の分析及び対策のあり方に関する調査研究事業研究報告書 2008; 165-176.
- 2) (社)日本看護協会：プロジェクトⅢ、訪問看護の利用促進に向けた対応策のあり方に関する検討、訪問看護事業所数の減数要因の分析及び対策のあり方に関する調査研究事業研究報告書 2009; 343-388.
- 3) 長江弘子、酒井昌子：地域で協働する訪問看護師の現任教育プログラムの意義と課題、訪問看護と介護 2004; 9(1)：6-12.
- 4) 池田紀子、岩崎朗子、雨宮多喜子：臨床看護スーパービジョン導入の試み 自身と他者からの承認を看護の質向上につなげる、看護管理 2004; 14(6)：463-468.
- 5) 石井享子、飯田澄美子：なぜ事例研究が必要なのか？、クリニカルスタディ 1990; 11(9)：81-84.
- 6) 宮本正己、小宮敬子、広瀬寛子、山村礎、武井麻子：精神看護における継続教育の方法論に関する研究－事例検討会の分析から－、日本精神保健看護学会誌 1995; 4(1)：1-12.
- 7) 桑野タイ子：看護現場で行なう“事例検討”、看護実践の科学 1993; 18(6)：19-24.
- 8) 松尾睦：経験からの学習－プロフェッショナルへの成長プロセス－、同文館出版、東京、2006、57-60.
- 9) 池西悦子、田村由美、石川雄一：臨床看護師のリフレクションの要素と構造 センスマイキング理論に基づいた‘マイクロモメント・タイムラインインタビュー法’の活用、神戸大学保健科学部紀要、2007; 23: 105-125.
- 10) 柳沢昌一、三輪健二監訳、ドナルド・A・ショーン著：省察的実践とは何か、鳳書房、東京、2007、21-77.

- 11) 中原淳, 金井壽宏: リフレクティブ・マネージャー, 光文社新書, 東京, 2009, 112.
- 12) 中原淳, 金井壽宏: リフレクティブ・マネージャー, 光文社新書, 東京, 2009, 144-145.
- 13) 中原淳, 金井壽宏: リフレクティブ・マネージャー, 光文社新書, 東京, 2009, 152.
- 14) 村松照美, 渡辺勇弥: 市町村新任保健師と熟練保健師の対話リフレクシヨンの意味, 山梨県立大学看護学部紀要, 2008; 10: 49-58.